

患者の
未来に寄り添う

信頼の
エクセレント
ドクター

2024年版

浪速社

医師として、がん患者として、患者の 秘められた願いと向き合う訪問診療医

“がんサバイバー”だからこそ実現できる緩和ケアを目指し続ける



患者さんと真っ直ぐ向き合う姿勢を大切に、
お互いが自然体でいられるように心掛けて
います

医療法人社団西日本平郁会 吉田クリニック

院長 田所 園子

代々続く医師の家系に生まれる 母を亡くした経験から麻酔科医の道へ

高齢化社会の進展と共に訪問診療へのニーズも高まり、「慣れ親しんだ自宅で最期の時を迎えたい」と望む患者は多い。しかし、「まだまだ訪問診療は広く知られておらず、そうした声に応えきれっていない」と語るのは、愛知県名古屋市中区で開業する吉田クリニックの田所園子院長だ。

患者が自分自身の死と向き合う終末期医療は、決して綺麗ごとだけで片付けられるものではない。そこには患者の本当の願いや家族の複雑な思いが交錯している。田所院長は、そんな複雑な事情にも真正面から向き合うことが信条だ。

麻酔科医として医師のキャリアをスタートさせ、緩和ケア医への転身を果たした田所院長は、実は自身自身が子宮頸部腺がんの「がんサバイバー」でもある。医師として、そして患者としての経験を踏まえて、患者や家族のニーズを丁寧に聞き取り、オーダーメイド型の医療を提供する彼女の思いを伺った。

代々続く医師の家系に生まれた田所院長は、愛知県一宮市で開業していた父の姿を見て、自然と医師を志すようになった。医師の道に進むことを父から反対されはしなかったものの、「大変な仕事だけど、本当にやれるのか？」と心配されたという。そんな言葉をかけられた背景には、田所院長の家族が経験した大きな出来事があった。

「実は私が中学校1年生のころ、母が亡くなっているのです。そんな環境で育ってきたので、医師という多忙な職業を目指そうとする私を心配してくれたのだと思います」



緩和ケア外来も備えており、患者や家族の多様な願いにも応えられる

「医師の仕事に戻ったあと、ふと『自分は今、患者の立場で話しているのか、医師の立場で話しているのか』わからなくなってしまったのです。ある患者のがんが再発したとの話を聞いたとき、あまりのショックに強い吐き気を感じてしまったほどでした」

もう医師を続けることは不可能かもしれないとさえ考えていた苦悩の日々は、「時間が解決してくれました」と振り返る。

時を経てもがんを患った経験を周囲に明かすつもりはなかったというが、そんな彼女の決心とは裏腹に、本人も想像しない形でカミングアウトすることになる。

発端は、2017年に受けたWeb媒体のインタビューだった。取材のテーマは、仕事と子育ての両立について。田所院長は、自身ががん患者であることは伏せて取材に応じた。しかし、がんの経験を触れずに仕事や生活を語ることが困難だった。

「どんな話をしようとしてもがんのことに行き当たってしまい、言葉が詰まってしまいました。そのため1度取材を仕切り直してもらい、これまでの病気の経緯を洗いざらい話すことにしたのです。話しながらも涙が止まらなかったことを今でも覚えています」

その記事が世に出ると、多くのがん患者から共感の声が寄せられたという。長い時間をかけて自分自身と向き合い、カミングアウトする経験を経たことで、田所院長は自身の体験談から感じた思いやアドバイスを患者に伝えられるまでになった。

順風満帆にも思えた人生に暗雲が立ち込めたのは、2010年秋のことだった。軽い気持ちで受けたがん検診で、田所院長の体に異変が見つかる。検査を繰り返した結果、彼女は非常に珍しい「子宮頸部腺がん」であることが判明した。

「自覚症状は全くありませんでしたから、患者の取り違えを本気で疑ったくらいでした」と当時を振り返る田所院長。3人の子育てに奮闘している時期で、ちょうど中学受験を控える子がいた。「受験が終わってから手術をしても」と考えたが、医師から早期の手術を強く勧められ、手術へと踏み切った。

幸い手術は無事成功し、経過も良好だった。しかし、1人のがん患者としての闘病経験は、医師としての活動に大きな影響を残した。

突如宣告された自身の子宮頸部腺がん 唐突に訪れたカミングアウトの機会

それでも医師への志を持ち続けた田所院長は、生まれ育った愛知を離れ、高知医科大学（現・高知大学医学部）へと進学。卒業後は麻酔科医の道を選じた。数ある分野の中から麻酔科を選んだ理由も、彼女の生い立ちが影響している。

「早くに母を亡くしたので、母と子が一緒にいる家庭に憧れがあり、自分自身の手で子育てをしたいと強く思っていました」

その思いから、比較的ワークライフバランスが取りやすいと考えて麻酔科を選択。結婚と出産を経験し、仕事と育児の両立に奮闘する日々が続いた。

がんサバイバーの医師だから伝えられること
患者と真摯に向き合う緩和ケア医として

カミングアウト前年の2016年。田所院長は麻酔科医から緩和ケア医への転身を果たすことになる。そのきっかけはアルバイト先の病院での経験だった。

「麻酔科医として定期的に出向いていた緩和ケア病棟で、看護師から『田所先生に緩和ケアをお願いしたい』と言われました。当時は自分ががん患者だと周囲に打ち明けていませんでしたし、自分には無理だと感じていました」

そう振り返りつつも、ある患者とのやりとりを経て心境が変化していった。30歳代の若さで緩和ケア病棟にいたその患者は、自身の病状に強い不安を覚えていたという。「自分に何かできることはないか」と感じた田所院長は、まずはじっくり時間をかけてその患者と対話することを選んだ。

「最初は本当に話を聞いただけでしたが、それでも『先生に話を聞いてもらえて本当によかった』と。その後、投与する薬を変えて痛みを和らげる対応もして、何度もお礼の言葉をかけてもらいました」

自分にしかできないことを模索して患者と向き合った経験は、彼女に1つの気づきをもたらすことになった。医師として治療をしながらも、がん患者としての経験も踏まえた自身の口から出てくる言葉の一つひとつが、患者にとって非常に的確なアドバイスになっていることを自覚したのだ。

「医師であり患者でもある自分だからこそ、できるアドバイスがある」
そう感じた田所院長は、緩和ケア医としての道を進むことに決めた。

訪問診療の認知度を高めることに注力
緩和ケアへの理解を深める

吉田クリニックを頼る患者の中には、いよいよ手の施しようがなくなり、自宅で最期を迎えたいと望む者も多い。そんな状況であってもベストを尽くすのが田所院長の信条だ。

「たとえ息を引き取る直前であっても、患者さんやご家族が希望するなら自宅で過ごしてもらおうべきだと考えています。そんな『たった10分の主治医』であってもご家族がどんなに喜んでくれるか、私たちはよく理解しているつもりです」

とはいえ、決して訪問診療のみに固執しているわけではない。重要なのは、「患者の願いに応じて最適な医療を提供することだ」と力説する。吉田クリニックは訪問診療を提供しつつ、緩和ケア外来も備えており、患者や家族の多様な願いに応えられる点も大きな強みだ。

「『医師や看護師が常にいる空間の方が安心できるから』と入院を選ぶ人もいますので、必ずしも在宅をおすすめしているわけではありません。ただ、どちらを選んだ場合でも、迅速かつ最適なオーダーメイド型の医療を提供できるようにするのが私たちの考えです」

そんな思いを持つてはいるが、実際はまだまだ訪問診療の認知度は低いのが現実だ。田所院長は今後のビジョンについて「やはり訪問診療を広めることに尽きます」と即答した。患者や家族、医師にさえもまだ知られていない訪問診療の周知に向けて、注力をする方針だ。

そして、訪問診療を広めることに加えて、「緩和ケア」のこともっと知ってほしいと呼びかける。現状では緩和ケアへの誤解も多いという。田所院長は、過去に自身が緩和ケア病棟に勤めていたときの経験



田所院長だからこそできる、訪問診療と緩和ケアを広めることに注力している

も数多くあるのが現実だ。「もつと早く見立てをして患者や家族に伝えていれば、と悔やむ事例も多々あります」と田所院長は自身を戒める。とはいえ、患者や家族にとって極めて重大な話であるだけに、「どのように伝えるか」といった難問も避けては通れない。

「知りたい人だけに適切に伝えるのは本当に難しいことです。でもその難しさから逃げないで、伝えるべきことは付度せずに伝える、というのが私のやり方です」

時には未成年の家族が相手であっても、患者の病状や死期を包み隠さず明かすという田所院長。そうした情報は患者側の責任者である「キーパーソン」のみに伝えることが一般的だと言われる中で、彼女の手法は稀だと言える。そんな選択をしている背景には、自身の経験が影響している。

「母が亡くなったのは私が12歳のころ。おそらくその数年前にはがんが発覚していたと思いますが、私には何も知らされませんでした。父にも考えがあつたと理解しつつも、それでも私は母の病気のことを知りたかつた。キーパーソンでなくても『知りたい』と願う人にはちゃんと伝えることを厭わないのは、あの時私が『伝えられていなかった側』だったからだと思います」

吉田クリニックを経営支援しているCUCグループ（東京都港区）が掲げる理念の1つに、『専門性』の前に『人間性』を重視する」とある。この理念をはじめ、同グループの姿勢に強く共感しているのは他ならぬ田所院長自身だという。

を振り返った。

「皆さん、緩和ケア病棟に移ると、『自分の人生は終わりだ』と悲観してしまいます。緩和ケア医である私は、死を看取る『おくりびと』だと思われていて、ある患者から開口一番『あんたとは会いたくなくなつた』と言われた衝撃は今も忘れられません」

しかし、そんな言葉を投げかけられて拒絶されても、田所院長の心は折れなかった。全身が汗だくになるほどの熱量を込め、その患者と対話を試みた。そしてその思いが伝わり、ついには「もうつらい治療はやめて、畑仕事をしながら自宅で過ごしたい」と本心を明かしてくれた。田所院長はその患者の要望をくんで治療の中断を決め、患者は希望通りの暮らしを送ることができた。その後、再入院を経て、自宅で息を引き取ることになったが、最期を迎えるまでの自宅での時間が、どれほど患者に安らぎを与えたのか想像に難くない。この事例に限らず、本音でぶつかる田所院長の姿勢は、自分の死を受け入れられない患者の頑なな心を動かしてきた。

「緩和ケアは決して、痛みを取り除く薬を投与するだけではありません。とにかく『今、あなたが何をしたいのか』を聞かせてほしいと強く願いますし、その願いに全身全霊で応えたいと考えています」

飾らない姿勢で患者と向き合い、 日々最良の看取りを模索し続ける

数多くの看取りを経験してきた田所院長だが、これまでを振り返ると後悔の連続だという。終末期の患者は、病状が予想以上に早く急変することも珍しくはない。その結果、家族とのお別れが果たせない事例

PROFILE

田所 園子 (たどころ・そのこ)

愛知県一宮市出身。

高知医科大学（現・高知大学医学部）を卒業後、麻酔科医に従事。3児の母として仕事と子育てを両立した日々を過ごす。

2010年に子宮頸部腺がんと診断され、広汎子宮全摘術を受ける。その後、緩和ケア医への転身を経て、高知県から地元・愛知県へ単身赴任。

現在は吉田クリニックの院長を務め、訪問診療の現場に立ち続けている。

INFORMATION

医療法人社団西日本平郁会 吉田クリニック



<https://ycl.or.jp/>

所在地

〒464-0081
名古屋市中種区谷口町4-5 プレステージ千種
七番館1F
TEL 052-723-0018
FAX 052-723-0019

アクセス

名城線「砂田橋」駅より徒歩13分
バス「谷口」停留所より徒歩4分

診療時間

訪問診療
※24時間対応
〈月～金〉9:00～18:00
※外来は月・水・金10:00～12:30
（電話による完全予約制）

対応可能地域

愛知県名古屋市中種区、昭和区、名東区、
守山区、東区、瑞穂区、天白区、緑区
（そのほかの地域については応相談）

診療内容

【対応可能科目】
内科、緩和ケア外来、精神科

設立

2000年4月

院長挨拶

緩和ケアは単に痛みをとることではありません。医師、看護師等多職種がチームとして関わり、患者様の生活の質を向上させる取り組みです。お話をしっかりと伺いながら患者様やご家族のやりたいことを叶え、できることを増やしていきたいです。

繰り返しているからだ。
医師として患者として、自分だからこそ実現できる訪問診療と緩和ケアを模索しながら、田所院長は今日も現場に立ち続けている。



患者の願いに応じて迅速かつ最適なオーダーメイド型の医療を提供している

「医師だからと偉ぶったりせず、患者さんと真っ直ぐ向き合う姿勢を大切にしています。私自身は決してぶれませんし、患者さんにも自分らしくいてほしい。常にお互いが自然体でいられるように心掛けています」
真摯に患者や家族と向き合う田所院長だけに、「実は、緩和ケア医になつてよかったと思うことはほとんどありません」という言葉は意外にも思える。しかしそれは、「もつといい診療ができたのではないか」という葛藤を日々